ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.22 No.2 February 2021

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

2

CONTENTS

- 巻頭言
  海外でのつとめの完成
  ／永尾教昭 …… 1
- 日本語教育と海外伝道（31）
  国際化の中での日本語教育②
  ／大内泰夫 …… 2
- イスラームから見た世界（10）
  イスラームと断食①―楽しく厳しいラマダーン―
  ／澤井　真 …… 3
- キルケゴールで読み解く 21 世紀（29）
  生命倫理とキルケゴール―逡巡と規範、逡巡と決断について―
  ／金子　昭 …… 4
- 伝道と翻訳―受容と変容の“はざま”で―（27）
  仏典翻訳の歴史とその変遷⑩
  ／成田道広 …… 5
- 遺跡からのメッセージ（66）
  大和の文化遺産を学ぶ④－1400 年の歴史を刻む法隆寺
  ／桑原久男 …… 6
- コロンビアへの扉 ―ラテンアメリカの価値観と教えの伝播―（14）
  5. コロンビアの体質 5
  ／清水直太郎 …… 7
- ヴァチカン便り（48）
  法王：人は慈悲で救われる
  ／山口英雄 …… 8
- 天理参考館から（23）
  ウシにまつわるお話
  ／幡鎌真理 …… 9
- 思案・試案・私案
  「碍」の字表記問題再考（11）
  ／八木三郎 …… 10
- 2020 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ（6）
  第 3 講：88「危ないところを」
  ／岡田正彦 …… 11
- 2020 年度公開教学講座、「教学と現代」の案内 …… 12

巻頭言

海外でのつとめの完成

おやさと研究所長　永尾教昭　*Noriaki Nagao*

天理教の最高祭儀であるつとめの一つの特徴として、非常に人手がかかるということがある。一般の教会でも 9 種類の楽器を奏でる者、6 人のておどりを勤める者、さらに歌を歌う者（地方（じかた））が 3 人で、しかも理想的には 3 交代なので計 54 人が必要となる。地方を 1 人として、交代なしでも最低 16 人である。

ところで天理教教祖中山みきは、文久年間（1861 ～ 64 年）の頃より信者に講を結成することを促すようになる。1867 年作の「みかぐらうた」（つとめの地歌）でも「どうでも信心するならば　講を結ぼやないかいな」（5 下り目 10。漢字混じりは筆者による）と歌っている。

通常、宗教は、教えが拡大していくのに伴い信者たちはその組織化を図り講などが結成される。キリスト教の教会（エクレシア）とは、現在は建物を指すが元々の意味は信者組織、言わば講である。天理教も同様に教会の前身が講であり、それは組織であった。例えば天理教初期の有力講の一つである「斯道会」も、建物はなく仏教寺院を会場として会合を持っていた。[1] やがて講は教会となり、現在教会と言えば組織というよりも建物、拠点を指すようになっている。

教祖が講の結成を促したのは、信者たちの修練と各地での教勢の拡張を意図したものであったと思われるが、同時につとめを完成させるための方策でもあったのではないか。この場合の「完成」とは、歌や踊りが制作され楽器が揃うことではなく、確固たる信仰を持った信者を十分な人数分揃えて勤めることを意味する。上記に述べたように、つとめには非常に人手がかかる。加えて、警察など公権力による激しい迫害もあり、勤める人たちを揃えることは決して容易なことではなかった。しかし、教祖は「おふでさき」（教祖の直筆による和歌体の神言）のなかでも「急き込みも何ゆへなると言うならば　つとめの人衆ほしいことから」（第 2 号 8。同）などと再三再四、つとめを勤修する人間を揃えることを強く要請している。

したがって現在でも天理教では、各教会がつとめを完全な形で勤められるように努力することが、つまりは信仰的成人が進むことを意味する。宗教というのは、キリスト教のミサでも仏教の勤行でもそれを執行することに重要な意義がある。しかし天理教の場合、つとめの執行それ自体も重要だが、それを勤める人たち―単に人数的な意味ではなく、揺るぎない信仰信念を持った人たち―を揃えることにも意義があると考える。これは天理教の一つの特徴だろう。

海外においても、まったく同様である。したがって、布教師たちは、当然ながら一日も早く、完全な形でつとめが勤められることを目指す。そのために、その国の中心拠点の長などは、その地にいる天理教信者を糾合することにまず主眼を置く。筆者もそうであった。そこで、日本人が移民として渡っていった国などでは、結果的に天理教の拠点がすなわち一種の日系人コロニーのようになってしまう。そうなると、その国の人たちは違和感を感じ、ますます入りにくくなるという負のスパイラルを起こす。例えば東京で、ある特定の国の人たちが集団になって信仰している、日本人に馴染みのない宗教の施設には、おそらく日本人は非常に入りにくいのと同じだ。

こういったことも、天理教が、国によっては後発の日本の宗教よりも現地人信者が少ないことの理由の一つではないか。つとめの完成を目指すこと、それ自体は極めて重要なことだが、現地の人たちでそれを成し遂げようとする強靭な根気が海外布教には求められるだろう。

［註］

（1）『天理教河原町大教会史』（第 1 巻）、1989 年、53 頁。